

ジェンダーをめぐる近現代の茶道言説：日本と欧米

加藤 恵津子

はじめに

筆者は1998年から1999年にかけて、文化人類学者として、「こんにち」日本で茶道を営む女性たちを特にジェンダーの視点からリサーチした。その際、現在の一般人および茶道修練者の茶道に対する認識に、近現代（ここでは日本と欧米の交流が活発化する19世紀末から現在までを指す）の、日本や欧米の知識人たちによる茶道言説や、日本と欧米のインタラクションが大きな影響を与えていることを実感した。

そのリサーチと、1995年から2001年までの自身のカナダ留学時代の経験に基づいて、三つのことを論じたい。一つは、日本であれ欧米であれ、近現代の茶道言説の中で、茶道を営む日本女性は、特に関心をもたれないか、あるいは持たれるとしたら男性茶道修練者よりも評価され「ない」形においてか、どちらかであること。二つ目は、このように女性茶道修練者が男性に比べ注目・評価されない背景には、精神と身体との二分法、そして身体は精神よりも価値が低いという考え方があった上で、精神は男性、身体は女性と結び付けられているのではないかということ。三つ目は、さらにこれに加え、欧米の一般知識人の中には、19世紀末以来のオリエンタリズム（東方趣味）が根強くあり、ただでさえ欧米以外の土地を「女性イメージ」で見るとに加え、日本女性を特に「ゲイシャ」（「芸者」ではない）と重ね合わせる傾向があること。さらに、点前という身体的パフォーマンスやお茶のサービスをするという点で、茶道を営む日本女性は特に「ゲイシャ」という単一のイメージでまとめられやすいということである。

このように、日本の女性茶道修練者は、日本の男性知識人からは十分な注目・評価がなされず、海外の男性・女性知識人からは誤解される傾向にある。これらの点は、今後、茶道を「国際日本学」の重要な一部として扱っていくために、ぜひ直視しておきたい点だと思われる。

Ⅰ. 日本と欧米の文献における「女性茶道修練者」観

日本国内・国外を問わず、茶道は、哲学・美学的研究、または歴史的研究の対象として扱われる傾向にある。いずれにしても茶道は、脱・世間的な営みとして、理念的なレベルで、ジェンダーとは無関係のように語られることが多い。もちろん近現代の茶道史においては、「茶道の女性化」、すなわち封建時代にはもっぱら男性が行っていた茶道が、明治維新以後、加速的に女性によって担われるようになった現象は特筆すべきことで、熊倉（1980）を初め複数の茶道史研究書がこの現象を詳しく論じている。しかし、たとえば現代の茶道には、女性が修練者の9割を占めるといふ無視できない特徴があるにもかかわらず、研究者や文筆家（その多くは男性）は特にこれに触れないか、あるいはもし女性について特に言及するとすれば、どこか軽蔑的な論調になるのが現状と思われる。

例えば作家の赤瀬川は、そのエッセイの中で、歴史上の前衛的茶道家（利休や織部）と現代の女性茶道修練者を対比させ、彼女たちの考えを（女性口調で）「代弁」してみせる。「私たちはこれでいいの。決められた形が上手に出来るのが嬉しいわけ。あなたは早く前に戻って、先頭を走りなさいよ」（赤瀬川 1990:227）。社会学者の山村は、「男性優位の社会において、女性は男性によって他者性として対象化され…女性自身もまた…男性の目により魅力的にうつるように競い合う。そのようなジェンダー関係がそのまま茶の世界に持ち込まれたとき…そこでは華やかさ・愛らしさ・派手・豪華などが賛美され、侘び・さびは…片隅に押しやられる」（山村1998:266）、「女性化とともに茶道から禅の精神が薄れていくのは、ほとんど必至であった」（1998:268）と論じ、さらには「…もし茶が高度な精神的文化として再生されるとしたら、どのような条件が満たされなければならないだろうか。第一に…なによりも女性自身による意識面での女性解放が試みられなければならない。男性への従属がなくなり女性が男性と対等になるとき、…その茶は男性にサービスするものである必要はなくなり、[女性は]茶の構造全体にわたって関与

するよう迫られることになるであろう。…つまり…禅の世界から遠ざかるのとは逆に、人間として改めて禅的精神に直面することになるであろう」(1998:272-273、強調は原文)と結論する。

これらの議論の根底にあるのは、従来男性が高尚な営みとして確立した茶道を、女性が墮落させてしまった、女性は所詮、見栄の張り合いや男性への媚びといった表面的なレベルでしか茶道を営むことができず、男性のような創造性や精神性に至ることは難しい、という前提である(私自身、現代の女性茶道修練者についてのリサーチの最中、美術史家の男性に「君のやっているようなトピックは、雑誌の記事にはなっても博士論文のテーマにはならない」という主旨のことを言われたことがある)。このように男性論者が、自分と同時代の女性による茶道を、本来の茶道からの逸脱や墮落とみなす議論は、すでに1929年に茶道家・高橋龍雄の著書に見られる。いわく「茶道は、古来学者の眼から見て、遊戯の部に入れられ、今も閑人又は婦女子の遊戯となつてゐるが、日本文化史の上から見ると、極めて重要な位置を占めてをる」(高橋1929; 田中1999:146から引用)。田中(1999)によると、この著書全体をとおして高橋が意図しているのは、茶道は本来「遊芸」ではなく「芸術」である、ということにより、茶道の価値を主張することらしいが、それにしても「芸術」とのネガティブな対比である「遊芸」または「遊戯」に、女性全体を、しかも「閑人(ヒマ人)」と同列にして結びつけるのはかなりの偏見と言わざるを得ない。

一方、欧米でも、茶道について書かれた文献は多くあっても、特にジェンダーの視点から茶道に切り込んだものを見つけるのは大変難しい。一つ、アメリカの社会学者モリが比較的最近書いたものは例外である。彼女は裏千家の茶道専門学校で参与観察を行いながら、そのほとんどが主婦・妻・母である同僚の女性修練者たちの人生において、茶道がどんな意味を持つのかを解明しようとしている。しかし彼女の観察結果は、「私の調査協力者のほとんどは、自分が生きている社会の価値を疑わない女性たちである。彼女らは社会の上下関係を受け入れ、また『どんな人にも物にも身分相応というものがある』という考えを受け入れている」(Mori 1996:119、筆者訳)というものである。モリは、このような女性茶道修練者の批判精神のなさの他、エチケットを習得してより良い妻やよりもてなし上手になりたいというのが重要な動機であること(1996:121)、表面的なものへのこだわりや歴史的関心の欠如(1996:122)、といった、あまり尊敬できない「特徴」の描写に終始してしまっている。

しかし私が1998年から1999年にかけて、東京首都圏の五つの茶道グループで参与観察を行った時、出会った人々(大多数は中高年の主婦層、そして少数は結婚前や結婚直後の若い女性)の中に、「男性のために」あるいは「夫のために」お茶をやっているという人は一人もいなかった。逆に、夫や未来の夫と茶道の関係について質問をしようものなら、笑い飛ばされるか、機嫌をそこねてしまうことがしばしばあった。また、中高年の女性たちの多くは、茶道を営むことを「勉強」という言葉で表し、点前の習得だけでは不十分だと言って、歴史や焼物、禅仏教などについて積極的に知識を深めようと努めている様子であった。一方で、わずかながら出会うことのできた一般の男性茶道修練者は、それぞれ中小企業の経営者、個人でベンチャービジネスをしている青年、学習塾の支店長で、どの人も、毎日の経済活動との関係から茶道を営む意味を見出している、という共通点はあったが、彼らが女性に比べて特に精神性や創造性が高いかという点、そのような印象は受けなかった。たとえばある会社経営者は、点前やそれ以外の勉強が自分にとってどのような意味を持つかよりも、自分が家元と特別な交友関係を持っていることを特に好んで話していた。

II. 「芸術：作法」＝「精神：身体」＝「男性：女性」

このようなことから、筆者は、なぜ女性茶道修練者は男性に比べより精神性に欠け、表面的なのか、ではなく、なぜそのように「語られてしまう」のかを問いたいと思う。そこで注目したいのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて日本で確立していった茶道にかんする二つの言説、すなわち「茶道は作法である」と「茶道は芸術である」、とジェンダーの関係である。田中(1999)と熊倉(1980)を参照しまとめるならば、「芸術」という西洋から輸入された新しい概念に基づく茶道観は、高橋龍雄をはじめ、男性知識人の間で提唱され定着したものである一方、「作法としての茶道」は、女学校の女性教育者たちによって提唱され、女性の間で定着したものである。筆者はここに、茶道が「精神を使って向き合う茶道」と「身体を使って向き合う茶道」に分離し、それぞれが男性と女性によって別個に担われるようになった状況、すなわち茶道における男女の「住み分け」を見る。

さらに、この二つの茶道の形態は、同等というよりも「上下」の関係にあったのではないかと考える。それは、明治期の社会一般が推し進めた「男女間の社会制度上の上下関係」に根ざしていたのと同時に、「精神と身体の間」の上下関係とも絡みあっていたと思われる。近代以降の西欧およびその影響を受けた諸社会においては、頭脳労働は肉体労働よりも価値の高いものとみなされる傾向がある。一方で、茶道を「芸術」と感じ、茶道具を芸術品と感じるには、教養と審美眼が必要であり、これらは頭脳労働を通してしか養われないのに対し、「作法」の習得は繰り返し身体に叩き込む肉体労働と言える。また、芸術鑑賞はそれ自体が崇高とされ、それ自体が目的となりうるのに対し、女学校での作法の習得は、将来家庭婦人として接客に困らないように、などきわめてプラクティカルな目的で為される。精神性の鍛錬の要素もあつただろうが、よき家庭婦人となるのに必要な以上に、女性が茶道の芸術性や精神性を学ぶことは奨励されなかったのではないだろうか（例えば熊倉1980:303が紹介する奥田正造は、女子を「禅と茶とで教育致したい」と願い、後に女学校の校長となったが、彼が茶道を通して女子たちに学ばせたかったのは「賓主応接の礼」「談論の和」といった術であり、芸術的鑑賞眼や超俗世的悟りではなかったということは示唆的である）。この時、主として「頭脳労働」を通して茶道に触れる男性たちは、主として「肉体労働」を通して茶道に触れる女性たちよりも優れた者であるという（暗黙の）認識が、社会になかったと言えるだろうか。

このように、茶道が「精神を使って向き合う茶道」と「身体を使って向き合う茶道」に分離し、それぞれが男性と女性によって別個に担われるようになった時、その二つの間での「上下関係」も生じたのではないかと推測する。この後者の、「精神と身体を二分し、その間に上下の関係を見る」発想は、いつから日本に根付いたのか、筆者には大変興味がある。というのも、日本の武道や芸道を見ていると、精神と身体の間で分離や上下関係がもともとあつたようには思えないからである。一方西欧では、精神と身体の間で分離と上下関係は、ギリシャ哲学以来、中世のスコラ哲学やデカルトらの近代哲学を通じて綿々と続いているが、これが明治維新とともに日本に入ってきて定着したのだろうか。さらに、フェミニスト哲学者の Bordo (1993) は、このような西欧哲学的二分法とヒエラルキーにおいて、つねに「精神」は男性と、「身体」は女性と結び付けられてきた、と論じている（これは、鈴木 (1998) で紹介されているバーナード・リーチの「男性＝身体」「女性＝精神」という対応とは逆の組み合わせだが、どちらの組み合わせも一理あるように思う）。いずれにしても、「男性＝精神的＝より優れている」「女性＝身体的＝より劣っている」という二項対立が、19世紀から20世紀にうつる前後に、茶道において見られるようになったと筆者には思われる。

ひとたび女性の茶道が「作法」という身体的かつプラクティカルな営みと結び付けられれば、「女性は、身体的で表面的なこと以外には関心がない」、あるいは「それ以外のことを習得する能力がない」というステレオタイプで男性から（また男性の影響を受けた女性自身から）見られるようになってもお不思議ではない。よって戦後になっても未だに、日本の男性知識人は、女性が何を茶道に求めているかを想像することも、実地調査をすることもなく、また一方で、歴史上のすべての男性茶道修練者が本当に精神的で創造的だったのかと問うこともなく、あるいは、そもそも茶道は精神的でなければいけないのか、という根本的な問いを呈することもなく、女性の行う茶道が逸脱や墮落であるという前提で議論をするのではないだろうか（注1）。そしてまたこのような、女性に対して批判的な国内の茶道論は、海外からの研究者が女性茶道修練者を見る目にも影響を及ぼすだろう。というのも、海外からの研究者は、日本の研究者や茶道家によって書かれたものを数多く読み、また来日して現地調査するにしても、現地でお会いする茶道（研究）の代表者の言説によって、ものの見方に影響を受けるものだからである。

Ⅲ. オリエンタリズム、そして欧米における女性茶道修練者観

一方、男女を問わず欧米の知識人が日本の茶道を見る際には、日本国内の人々が茶道を見るときには無いような、独特のフィルターがかかっているように感じられる。それは筆者が、茶道をトピックとして扱う記号論研究者・文化人類学者としてカナダに6年半住む中で、常に感じられたものである。一言でいえば、知識人の中には、たとえば大学の研究者であれ「茶道＝ゲイシャの営み（以外の何物でもない）」と誤解している人が少なくないということである。さらに知識層でない人も含み、日本女性全体を「ゲイシャ、またはゲイシャのように他人にサービスする人」という単一のイメージで表象することは未だにポピュラーである（これにはもちろん、実際に京都で、芸者や舞妓

が海外からの観光客のために茶道のデモンストレーションをしたり、舞妓がお茶を点っている絵葉書が売られたり、という、日本の観光業界側の長年にわたるワンパターンな戦略にも原因がある)。このような状況下で、「茶道修練者の女性」一般は「ゲイシャ」と混同されやすい。

断っておくが、筆者は実際の芸者の仕事が卑しいと論じているのでもなければ、日本女性一般が「卑しい仕事をする者」と混同されて迷惑だと言っているのでもない(注2)。ここでは、実際の芸者の仕事の貴賤はまったく問題ではない。そうではなく、多様であるはずの日本女性が、たった一つのイメージで表象されることを危惧しているのである。さらにそのイメージが、欧米で(オペラ「蝶々夫人」に象徴されるように)欧米人の願望や趣味に合わせて作り変えられ、独り歩きしていることが問題なのである(よって実際の芸者と区別するために、「ゲイシャ」とカタカナで書いている)。これは、実際の金貸しという職業の貴賤にかかわらず、ユダヤ人男性全員を「金貸しのイメージ」(そこにはユダヤ人嫌悪の原因となる「かめつい」「冷酷」といったネガティブな含みが不可分にまわりついている)を通して見るのが危険であるのと同じである。

印象的だったのは、筆者が現代の女性茶道修練者についてカナダで盛んに学会発表をしていた1998年から2000年頃、発表後に、「あなたがリサーチした女性たちとゲイシャはどんな関係にあるのですか」と尋ねられたり、「あなたの発表は lovely だった(注3)。私は最近、ゲイシャの小説を読んでね、云々」と声をかけられたりしたことである。これには1997年に、Arthur Golden というアメリカの男性作家が、*Memoirs of a Geisha* 「あるゲイシャの回顧録」というフィクションを出版し、これがアメリカやカナダでベストセラーになっていたことが背景にある。この小説の中で茶道の描写が出てくるのはほんの一部だが、それが「ゲイシャの修行の中でもっとも重要な部分」と書かれているため(Golden 1997:144)、たしかに日本文化を良く知らない人が読むと、茶道が芸者の芸道「以外の何物でもない」かのような印象を受けるだろう。他にも、「僕の学校にゲイシャが来て茶道のデモンストレーションをしてくれたことがあるよ」など、海外で茶道を見せる日本女性を(それが茶道教授者か、日本大使館の大使夫人かにかかわらず)「ゲイシャ」という一言で呼んでしまう人もいる。あるいは京都の裏千家茶道資料センターの1階ロビーで、海外からの観光客が、明らかに高位の茶道教授者である着物を着た女性たちを見て、「あの人たちはゲイシャですか」と筆者に尋ねてきたことがあった(彼らは、男性の家元や茶道修練者を見たらどのような言葉で表現するのだろうか。興味深いところである)。

話は茶道から少し離れるが、いまだに欧米、とくにアメリカで、日本あるいは日本女性のシンボルとして「ゲイシャ」が好まれる背景として、19世紀末以来のオリエンタリズム、すなわち「東方趣味」が根強く存在していると思われる。植民地主義批判の立場をとるフェミニスト研究者たち(たとえば McClintock 1995; Sinha 1995; Krishanswamy 1998)によると、植民する側は、植民する相手の土地やその住民(男性住民も含め)を、「女性イメージ」、すなわち征服されるのを待つ「受け身の性のイメージ」(ここでも女性一般が実際に受け身であるかどうかはまったく関係ない)で語る傾向があるということである。日本は、明白な形で欧米の植民地になったことはないにしても、欧米とくにアメリカが、いつかは征服したい、覇権を広げたい土地として、常に「女性イメージ」で語る必要があった、またはある土地なのではないだろうか。

このような背景において、実際、明治期や第二次大戦の日本の敗戦後に、海外からのVIPの接待に大活躍してきたであろう芸者(後に「ゲイシャ」)は、「女性的なるニッポン」のまきうってつけのシンボルであると思われる。そして、着物をまとい、点前という身体的パフォーマンスをし、お茶という飲み物でもてなす茶道修練者は、それが女性であれば、容易に「ゲイシャ」と混同されるのだろう。

筆者がさらに危惧するのは、このような誤解はそのままにして、海外駐在や留学の折には、資格のあるなしにかかわらず、ほとんど常に女性が、茶道のパフォーマンスを自ら担い、ジェンダーバイアスのかかった欧米のオリエンタリズムを助長してしまうということである。私がリサーチ中に知り合ったある初老の女性は、茶道を習うようになったきっかけは、自分の娘が留学前に急遽、数ヶ月間茶道の稽古をするのに付き合ったことだ、と言っていた。また、私の知るある高校の女性教員は、夏のホームステイプログラムの生徒の引率としてアメリカに行くことになった時、あわててスーパーにかけこんで茶碗を買い、現地では冷汗をかきながら、なんとか茶道のパフォーマンスをしたそうである。このように、海外への渡航を目の前にして、女性が突如プレッシャーを感じ、「あわてて」茶道を身につけようとする例をよく耳にする一方で、男性がそうするという話は聞いたことがない。これは、(伝統芸能の保持者と

しての芸者ないし「ゲイシャ」のイメージからか、)「日本女性は(全員) 伝統文化を今でも担っているはずだ」という欧米人の思い込みに、女性自身が自らを合わせてしまっている現象ではないだろうか。

かくいう筆者も8年前、アメリカで行われるある小さな国際学会に、茶道についての発表者として申し込んだ際、「茶道のデモンストレーションもやってくれないか」と頼まれたことがある。筆者がもし研究者でありながら茶人でもあったなら、喜んでやるどころだが、実際はそうではない。よって筆者は、自分は研究者であり、パフォーマンスは入門レベルであって人前で見せるような資格はない、また、茶道は茶室や道具というセッティングがないとできないものだ、と言って断った。が、学会長は「それでもいいからやってくれ」と譲らない。「茶道がどういうものか知っている人は少ないから、君の発表の前日に皆に茶道を見せておいたほうが、君にとっても良い」という返事である。仕方なく苦肉の策として、現地に最小限の道具を持っていき、それこそ「あわてて」買った着物を着、NHKの茶道講座のビデオを多用し、自分の専攻の記号論的な視点からのなかば学術的な発表を行った。会長には非常に感謝されたが、筆者自身には未だに腑に落ちないものがある。たとえば、「共産主義崩壊後のロシアにおけるコサックダンスの意義」というテーマを扱っているロシア人の男性研究者がいたとして、彼は国際学会で、「コサックダンスを見たことがない人がたくさんいるから、皆の前で踊って見せてくれ」と頼まれることがあるだろうか。また、もし筆者が日本人の(茶人を兼ねているわけではない)男性研究者なら、茶道をやってみせるようにと頼まれたらどうか。筆者にはどうしても、自分が日本人で、女性だからという理由で、パフォーマンスができるはずだと思われ、それを強要されたような気がしてならない。そして資格がないと知りながら、粗雑なパフォーマンスをしてしまった自分を未だに苦々しく思い、また、「それでもいいから」と依頼してきた人のセンスをも苦々しく思うのである。

このような誤解に満ちた状況を打破するには、資格のない女性が、女性だというだけで海外で安直な茶道のパフォーマンスをすることを控えること、もし茶道をするなら長期で勉強して行くこと、また茶道にも「伝統文化」にも限らず、「大衆文化」を含め自分の得意分野での交流をはかること、と同時に、女性への「文化的外交官」としての期待過多の状況を打破すべく、男性もまた、茶道を含む日本の「伝統文化」、あるいは「大衆文化」を使った海外での交流に、積極的に参加してほしいものである。

おわりに

今回は、「国際日本学の可能性」というシンポジウムの一貫として、特に「茶道」のセッションがもうけられたことを非常に嬉しく思う。欧米のオリエンタリズムの中で生まれた Japanology ではなく、日本発信型の「国際日本学」を構築していくにあたって、茶道は、国内でも国外でも研究する人が多く、注目を引きやすいという点で、すぐれた出発点になるだろう。しかし同時に、過去に多く研究されてきたがために、新しい視点で論じにくいという難点もあり、だからこそ既存の議論の枠組をつき崩すことが緊急に必要なトピックでもあるだろう。「構築のためのつき崩し」をするのに重要な一視点として、茶道におけるジェンダー、そして、近現代の日本と欧米のインタラクションに注目してみることをお勧めしたい。

注1. 参考までに、筆者自身は、「茶道の本質」にあたるものは「身体の動きのコントロールによる精神のコントロール」のみであって、これをどのような精神的価値と結びつけるかは、修練者や論者の生きている時代・階層・ジェンダーなどによって変わる、と考えている。それは茶道史を見る限り、茶道が、禅仏教、儒教、道教、そして「遊芸」など、(恣意的といえるほど) さまざまな価値観と結びついてきたように見えるからである(詳しくは Kato 2004を参照)。よって例えば、「女性の茶道は、禅仏教の精神からかけ離れているから逸脱/墮落である」という批判は、「禅仏教が茶道の本質であるという根拠はないから、無効」だと考えている。

注2. まさにこのような誤解と、そこからくる批難が予想されるために、この「ゲイシャ」トピックは扱いが難しいのである。少なからぬ日本女性が(特に海外で)不快感を味わってきたであろうにもかかわらず、これまでに欧米読者向けに決定的な「ゲイシャ・イメージ批判」の本や論文が出ていないのは、下手をすれば日本人も含めた読者から、職業の貴賤を論じる差別主義者とのそしりを受ける危険があるからと筆者には思われる。

注3. “Lovely”「愛らしい、ステキ」という単語自体、アカデミックな評論の場面では通常は使わない語である。筆者は「対等な研究者として扱われていない」という印象を受けたものである。

参考文献

赤瀬川原平『千利休 無言の前衛』岩波書店、1990年

Bordo, Susan. *Unbearable Weight: Feminism, Western Culture, and the Body*. University of California Press, 1993.

Golden, Arthur. *Memoirs of a Geisha*. Vintage Canada, 1999 (Originally from Alfred Knopf, Inc., New York, 1997) .

Kato, Etsuko. *The Tea Ceremony and Women's Empowerment in Modern Japan: Bodies Re-presenting the Past*. London: Routledge Curzon, 2004 (forthcoming).

Krishanswamy, Revathi. *Effeminism: The Economy of Colonial Desire*. University of Michigan Press, 1998.

熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980年

McClintock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Context*. Routledge, 1995.

Mori, Barbara Lynne Rowland. "The Traditional Arts as Leisure Activities for Contemporary Japanese Women."

In *Re-Imaging Japanese Women*, ed. by Anne E. Imamura. University of California Press, 1996, pp.117-134.

Said, Edward. *Orientalism*. Vintage Books, 1978 (Originally from Pantheon Books, 1978) .

Sinha, Mrinalini. *Colonial Masculinity: The 'Manly Englishman' and the 'Effeminate Bengali' in the Late Nineteenth Century*. Manchester University Press, 1995.

鈴木禎宏 「『東と西の結婚』のヴィジョン バーナード・リーチの芸術志向」、『比較文学研究』東大比較文学会、71号、1998年、87-108頁

高橋龍雄『茶道』大岡山書店、1929年

田中秀隆「茶道文化論の構造」、『茶道文化論 茶道学体系 一』千宗室監修、熊倉功夫、田中秀隆 編、淡交社、1999年、135-172頁

山村賢明『茶道の構造』世織書房、1996年（特に「8章：ジェンダー問題としての茶」）